



金融財政

2006年(平成18年) 9月11日 (月) 第9774号 (購読料金 月額税込み5,565円)

ペットブームと少子化対策

お茶の水女子大学教授 篠塚英子



脱OLした嫁は、
駆け出しの野良猫専
門の写真家である。
出版ホヤホヤの小作
品「Slow Time」

(新風舎)をもらった。レンズを通して人間を直視する猫の目は穏やかだ。写真の傍らの「自分のリズムで歩いていく」「気がつけばいつもひとり」などの一文は、独り身の彼女自身のホンネであろう。極暑の都会を逃れた知人と、所要があつて都会に出てきた別の知人。それぞれの飼い猫の悩みは、偶然にも同じである。どこにでも居を移す融通が利かない猫たち。人間が旅するとき、家族の誰かが彼(彼女)のために留守番をせざるを得ない、という悩みである。

空前のペットブーム。ペット愛好家が日本にどのくらいいるのか、正式な統計を知らない。インターネットで検索すると、「ペットジャーナル」に概算1200万人とある。

もしこの数字を世帯に読み替えると、4678万全世帯(2000年)の4分の1になる。現在世帯構成は1人世帯とそれ以外が1対3である。少子化・高齢化の進行で、1人世帯の増加が予想されるから、一段とペット愛好家は増えるであろう。ペットの病院・美容院、墓地埋葬等々のビジネス産業が、続々と登場してネット上でもにぎやかだ。疑似家族の一現象であるから納得する。

ある小文を思い出した。昭和20、30年代にスピッツ犬が大ブームになったことを。敗戦後の経済復興からようやく生活にも経済的ゆとりが出てきた社会現象であつた。見た目は小さくかわいいが、無駄吠えしてうるさい。そのため人気が廃れた。その後ブリーダーによって性格が穏やかに改良され、再び市場に出回るようになったそう。

他方、人間社会では少子化に歯止めが掛からない。当然だろう。現在の経済は無駄吠えするペットを抹殺し、市場経済と歩調を合わせてきた。その終着点なのだから。子供の泣き声をうるさいと思う環境は、現在の子殺し、子供虐待にまで一直線に結び付く。

どんな生き物にも無駄はない。いわんやヒトの子は。この原点に戻って少子化対策を再考すれば、何とその根が深いことか、震撼とする。

CONTENTS

- 解説 増勢続く設備投資、
気掛かりな輸出数量減少 (公文 敬) 2
- BANCO (安藤 博) 3
- 照一隅 金融危機を再燃させるな (文) 5
- インサイド 株主無視より法廷闘争を 8
- 政経深層 消費者金融の裏側 (岡 憲策) ... 9
- News Eye
07年度予算概算要求82.7兆円 10
- 拍子木 草木もなびく「新政権」(庸順然子) 11
- 翔んでけスポーツ (谷口源太郎) 13
- インタビュー
問われる「損保不信」への対応策を聞く
—石原邦夫・日本損害保険協会会長 14
- カラム・コラム (藤原作弥) 15
- 海外誌紙に見る日本の評判 17
- 追加型株式投信ランキング〈8月末〉 18
- 資料 中小企業月次景況観測 〈8月〉 19
- 北風・南風 (長野) 20